

一筆致啓上候 今以春寒御座候処 弥御安全可被成御

暮 珍重ニ奉存候 御内室様御不快如例 追々御全快

ニ被為向候哉 御様子致承知度奉存候 折角御加養專

一ニ奉存候 然ハ三才発秘壹帙 早速御下し被下 当

月四日着のよしニて 丁子屋が被届之 忝慥ニ致落手

候 然処磨滅本ハかねて承知ニ御座候へとも よほと

落丁有之候 此地ニ本一向無之 懇意之方ニ所持之仁

も無御座候間 右落丁書足し候事も出来かね候 依之

其御方ニて右落丁鴈皮帟へ成共 薄ミのニ成とも 筆

工ニ御書せ被遣可被下候 右入用ハ追而御勘定可致候

夫共今度上本御手ニ入候ハ、直段少々増候共上本御

座候ハ、売かえ候てもよろしく候 右落丁別紙ニ認

上候 少々落丁ニあらず 彼は拾餘丁の落丁ニ御座

候間 何分此まゝ差置かたく 御面倒奉願候

一俠客傳之事 先便得貴意候通り 惣もくろくほり直し

ニて 今以製本出来不申候 うり出し存之外及延引

残念之仕合御座候 弥長崎表へ御出立ニ御座候哉 御

様子承度奉存候 先ハ右落丁書足之事御頼申度 早々

如此御座候 恐惶謹言

二月八日

篁 民

河内屋

茂兵衛様

御地ニてハ俠客傳もはや御うり出し被成候半と奉存候
評判いかゞニ候哉 承度奉存候

一七 〔天保三年〕四月二十八日

〔紙背・別筆〕

辰五月十八日返書下し

一筆致啓上候 漸赴夏氣候処 弥御揃御安全被成御暮
珍重奉存候 御内室様御病氣御痊可のよし 誠以目出
度奉賀候 右ニ付三月五日比御出立ニて 長崎表に御
旅行のよし 是又目出度奉存候 最早此程ハ御帰着被
成候半と奉存候 右御様子承度 今便態と二月中之御

返事得貴意候事ニ御座候

一三才発秘落丁之事 御頼申候処 幸ひ御店ニ同本売口

有之 右之内ハ御抜とり被遣之 御心配不浅忝奉存候
其内自序三丁は其御方ニも落丁ニて無之よし 致承知
候 先々本文落丁さし入大慶奉存候 右御礼申演候

一俠客傳御地評判宜敷よし 御同慶ニ御座候 再校合早
速可致処 去冬中々今以著述ニいとまなく 中々不
急 校合抔いたし候暇無之候 且一端うり出し候あと
の校合ハ はり合なく何分すゝミかね 彼是ニて 及
延引候間 先つぜひくはやく直さねハならぬ所斗書
ヌキ 御めにかへ申候 此分ハいつれそのまゝにいた
し置かたく候間 此分早々御直させ被成候て 直り候
ハ、 抜すりニ被成御見せ可被下候 外ハカケツ等
ニ御座候間 たとへあのまゝさし置候とも さのミ障
りニ成候程の疵にハ 無之候 去ながら俠客傳二輯ほ
り立出来 校合之節抔 一処に再校いたし度心かけ申
候 何分一日もいとま無之 只さしかゝりハ著述ニの
ミ追れ候 此段御賢察之上 此分御直させ可被下候

委曲ハ拝顔之節 くハしく可得御意候 則右書抜別帋
相添申候

一紀州名所図会 俠客傳二輯の引用ニ入申候処 手前ニ
所持不致候 丁平ニハ同本可有之候へとも 早速見候
て返し候事も成かね候 かし本ニ被致候を 久くと
め置候もきのとくニ御座候 御店ニ有之候ハ、 古本
ニていか様ニ手すれ候ても不苦候間 御出府之節ニて
も早々御携可被下候 近々式輯著述ニ取かゝり候間
はやくほしく御座候 此段奉願候

一醒世恒言

平山冷燕

連城壁

右無拋方々たのまれ候 右之本御店ニ有之候哉 直段
何ほとに候哉 まづ直段斗御しらせ被下候様奉願候
一俠客傳御地にてハ 八冊にとちわけ 御うり出し被成
候よし 及承候 それハ甚よろしからぬ事ニ御座候
作者ニ不沙汰にとちわけうり出し候事ハ不致筈 前々
がきひしくとり極メ置候処 御存無之哉 承り度候

先年平林庄五郎 弓張月拾遺をとぢわけ候事あり 御
地河太ニて巡島記五編ヲとぢわけ候事有之 いづれも
不沙汰ニいたされ候得とも はやくそのよし聞え候間
きひしく申断 とぢわけ分増潤筆うけ取 その上ニて
証文取置候事ニ御座候 とぢわけ候へハ 一冊ニ付半
冊つゝの潤筆をまし候事 是迄のとり極メにて 例も
御座候 五冊のものを八冊ニ被成候へハ 老冊半分増
潤筆御出し可被成候 作者ハ一冊つゝニて潤筆申請候
一冊廿五丁つゝ五冊ニて百廿五丁ニ成候へ共 左様ニ
きつと百廿五丁ニは書とりかね候節ハ 百廿七八丁ニ
も百三十丁ニも及ひ候得とも 五冊ニ候へハ数丁ニ拘
り不申候 然共とぢわけて冊数ふえ候得ハ 一冊のと
ちわけ半冊分まし潤筆うけ取候事 毎々とり極メニ
御座候 もし十四五丁ニてかすもの御好ミ候ハ、 已
来ハ一冊十四五丁つゝに綴り可申候 此段丁平殿へも
可申入存候得とも せわしく御座候間 いまた丁平へ
ハ不申候 これらの義いつれ御出府之上くハしく可申
候 此一義御返事はつきりといたし不申候てハ きの

一八 「天保三年」九月一六日

とくなから式輯の作ハ 当分出来かね候 とくト御勘
考可被成候 尚心事後便ニ可申達候 恐々謹言

四月廿八日

篁民

河内屋

茂兵衛様

一八 「天保三年」九月一六日

一筆致啓上候 追日秋冷之節 御揃弥御安全之由大悦
不過之珍重ニ奉存候 随而蔽屋相替事無之候 御休意
可被下候 然ハ八月廿七日御状九月七日自丁子屋相達
忝致拜見候 先便得御意申候西廂記落丁并ニ琵琶記落
丁磨滅等之義 御承知被下 当地横山町壺丁め和泉屋
金右衛門殿ニ同本御預置被成候ニ付 申遣し引替候様
御示談之趣 忝承知いたし 早速丁子屋相頼ミ 和泉
や右西廂記琵琶記共取よせ 落丁等それ〳〵改見候
処 西廂記ハ泉金の本落丁無之ニ付 則引替申候 琵琶